

葉集を読む

松岡 隆子

を詠んでいて軽やかで明るい。

夜更しの灯を消してより冬めきぬ

宮崎美智子

読書に耽ったり、文章を書いたり、あるいは明日の句会の俳句を考えていたり、つい夜を更かしてしまうことになる。何かに集中している時は寒さも感じないのだが、明かりを消して真っ暗になると急に寒さが身に沁みてくる。〈夜更しの灯〉に作者の日常が想像できる。

家計簿に一行小鳥来るとのみ

宮田 悦子

朝からしきりに鳥の鳴き声が聞こえる。山から小鳥たちが渡って来たようだ。小鳥たちの明るい鳴き声に秋の訪れを感じている。早速家計簿の余白に「小鳥来る」とメモする。初桜や初蝶を見た日、初蛙や初蟬の声を聞いた日等々、家計簿にはいろいろなメモ書きがある。宮田さんの丁寧な暮しぶりが窺える。丁寧な暮らしの中から俳句で日記を綴っている。

何もかも延期となれり月仰ぐ

山下なつ子

コロナ禍の中、何もかも延期となり自粛の日々が続いた。中止ではなく延期であることはせめてもの救いだ。コロナ禍が収まればまた句会も再開できるし、旅行にも行けるようになるだろう。〈月仰ぐ〉は祈りである。その後緊急事態宣言が解除され、句会も再開され、自由に行動できるようになった。とは言え、慎重に感染対策をしながらである。当分は

身の程に生きて八十路の露けしや

鈴木 富代

身の程とは、自分の身分、地位、能力などの程度、と辞書にある。この身の程は生来定められているものではなく、その後の生き方によって決まってくるものと言えよう。身の程に生きるとは身分相応に生きるということである。年齢に拘わらず身の程をわきまえて生きることが、爽やかな生き方だと思ふ。八十路ともなればそれは爽やかというより〈露けし〉だという。眸先生の句に〈別れ来て露けきひとと思ひをり〉がある。〈露けき八十路〉も〈露けきひと〉も露の煌めきのようにしつとりと美しい。

コスモスの風をひろげてゐたりけり

醍醐喜美枝

一読、一面のコスモスの野に風が吹きわたる景が見えてくる。明るい秋日が風と共に拡がってゆく。〈ひろげてゐたりけり〉とゆつたりとした表現に風の氣息が思われる。主役のコスモスの擬人化がまことに適切だ。平明な言葉で平明な景